

韓国に帰還した海外養子たちのアイデンティティと教育支援

—彼／彼女らの内的葛藤についての質問紙調査を中心に—

坂井菜央美[†]

[†]東京大学大学院教育学研究科 博士課程

1950年代の朝鮮戦争後から、韓国では、海外へ子どもを養子として送り出すことが始められた。その数は、現在までに15万人以上になっている。海外へ養子縁組された子どもたちは、成長する過程で、様々な精神的葛藤を体験する。自分のアイデンティティは、何なのか悩む場合も多い。そのような海外養子たちが、2000年以降、韓国を訪問する事例が急増している。現在、韓国では訪問した海外養子たちに様々な教育プログラムを提供している。本研究は、よりよいプログラムを考える基礎研究として、海外養子たちのアイデンティティ葛藤から見る教育支援について、質問紙調査による量的分析から試みるものである。彼／彼女らの成長の過程、葛藤の多さとの関係、実親再会の意味など、アイデンティティ葛藤の要因を探る。

キーワード：アイデンティティ、韓国海外養子、生涯学習

目次

- 1 はじめに
 - 2 アンケートの趣旨と問題構成
 - 3 アンケートの実施概要と回答者の属性
 - 3.1 実施概要
 - 3.2 回答者の【属性】
 - 4 質問への回答分析
 - 4.1 I 養親と生育環境に対する認識
 - 4.2 II アイデンティティ葛藤・自己肯定
 - 4.3 III 韓国イメージ
 - 4.4 IV 韓国との融和・韓国人ととの交流
 - 4.5 V 教育プログラムに対する評価
 - 4.6 読み取れること
 - 5 いくつかのクロス分析
 - 5.1 アイデンティティの混乱体験と必要感
 - 5.2 韓国人意識とアイデンティティ
 - 5.3 韓国滞在希望と「養子制度」観
 - 6 まとめ
- 1 はじめに
- 筆者は、韓国の海外養子を巡る研究において、内面の心理的葛藤研究の重要性を指摘した¹。その関連で、彼／彼女らに提供される韓国での各種教育プログラム(養子斡旋児童養護センター、大学、NGO、YWCAなどが主催する韓国語・韓国文化学習の講座など)にも、いくつかの問題と課題があることが指摘されている。ある養子へのインタビューでは、『家族』や『韓国の血縁主義』の大事さの講義が何度も繰り返されたためにいやになってしまった」と語られた。また個人主義が強い欧米育ちの生活文化と韓国の集団主義の文化が合わず、その集団性を押し付ける学習環境に問題を感じている場合も指摘されている²。
- 本稿は現在成人(多くが20代-30代)となって

韓国に帰還している海外養子たちに、アイデンティティの葛藤体験の問題、またなぜ訪韓したのか、さらに受けている教育プログラム評価について質問紙調査を実施し、その教育支援のための条件を探りたいと考えた。

韓国海外養子たちの精神的な側面についての研究は、早期のものではパク・インソンが、海外養子たちの心理社会的適応度を測定することを進めた³。測定には「アイデンティティ」、「自己尊重感」、「民族アイデンティティ」、「社会的適応(職場,友人,家族)」の諸概念を用いた。海外養子たちは、養父母,周辺の人々,外母(委託母か)という自己に関わる人々との出会いと離別,養子に出された背景や実父母への懐疑などの初期の心理的葛藤により,養父母と社会への適応も困難な経験をすることが指摘されている。イ・ミソンはルーツ探しがアイデンティティと密接な関係があり,実父母または実家族と連絡や対面をすることにより,アイデンティティが一層強くなることを明らかにしている⁴。これらの諸研究は,各種の児童養護センターの「母国訪問プログラム」に,積極的にルーツ探しを組み入れる後押しとなった。つまりルーツ探しを中心とした韓国語や韓国生活適応の教育プログラムを設けるように変化してきた。

コ・ヘヨン,イム・ヨンシクは,教育プログラム参加者に対して事前インタビューを実施したが,多くの海外養子たちは,養父母との関係で困難なことを経験したり,また思春期の頃に多くの葛藤や彷徨をしたという。そのうえで彼女らは,海外養子たちの「韓国との接触」の程度がどのように心理社会的な適応(アイデンティティ,社会的孤立感,民族アイデンティティ)に影響を与えるかを調査している⁵。ここで言う「韓国との接触」とはルーツ探し活動,韓国人(海外養子を含む)との接触,韓国人団体との接触と活動参加,韓国の歴史と文化体験などである。なお心理社会的適応の低位範疇として「民族アイデンティティ」、「生の満足感」、「社会的孤立感」の3点を設定している。結論として“海外養子たちの民族アイデンティティが高いことは,自身が養子に出された国家と社会の中でも帰属感を感じることができないために,その孤立感を解消してアイデンティティを探そうという努力を多くする。そのために民族アイデンティティが高いことが類推できる”と指摘している⁶。韓国人より,海外養子たちの民族アイデンティティが高いのは愛国心や矜持心ということより

は,欧米の「白人」中心社会で自身がその社会に帰属しづらいという疎外感をより強くするために韓国人アイデンティティをより高めたとしている。

本稿ではコ・ヘヨンらの研究で低位範疇として指摘した「生の満足感」,つまり個人の生き方,生の意味と連関した側面に着目していきたいと思う。

「生の満足感」に結びつけ,海外養子たちの「養親と成育環境に対する認識」,「アイデンティティの葛藤・自己肯定」,「韓国人イメージのあり方や韓国人との交流体験」,「教育プログラム参加体験」などについて質問紙により調査したいと思う。

2 アンケートの趣旨と問題構成

質問紙は回答者の【属性】を除いて,19の質問項目で構成した。19の質問項目は,そのねらいによって,I群~V群に区分した。質問のグループについて説明すると,I群とII群が,韓国訪問(帰還)の前提となる「養親との関係性」,「成育過程でのアイデンティティ葛藤」などについて尋ねている。ここでは海外養子という,いわば特別な成育環境のもとでの自己形成の過程は,アイデンティティを巡るさまざまな葛藤を引き起こしてきたと推察されるが,ここではこの問題を考えたいと思う。

III群,IV群は,訪韓(帰還)後の認識変化について質問している。III群の「韓国イメージの変化」では,韓国滞在によって生じる,韓国社会の肯定観や否定観を基準としたイメージの変化を明らかにしようとした。IV群では,多様な韓国人との接触,交流などの具体的な体験をもとに,「韓国への見方の変化,韓国でのなすべき課題の発見,韓国人に対する認識変化」などを明らかにしようとした。

V群は,韓国社会に適応するため,国私立大学や海外養子斡旋機関(児童養護センターなど)で提供する教育プログラムの受講体験を通して,教育プログラムのあり方について聞いている。

「表1」が質問構成一覧である。

具体的質問は以下のとおりである。なお19までの各質問は,基本的には「①思う」「②少し思う」「③あまり思わない」「④思わない」「⑤わからない」等の選択肢の中から選択する方法をとった。

【質問項目】

I群・養親と成育環境に対する認識

【4】養父母は韓国訪問に協力的でしたか

【12】韓国の海外養子に対して,あなたは肯定的に

	群のねらい	質問番号
I	養親と成育環境に対する認識	【4】【12】【14】
II	アイデンティティ葛藤・自己肯定感(自己相対化)を巡る認識	【3】【8】【9】【10】【11】
III	韓国イメージの変化	【1】【2】
IV	韓国との融和・韓国人との交流	【5】【6】【7】【13】【15】
V	教育プログラムに対する評価(韓国社会との関係性を中心に)	【16】【17】【18】【19】

「表 1:質問紙構成」

受けとめていますか？

【14】生後、韓国に残るより海外養子されたことが自分の未来のためには良かったと考えますか？

II群・アイデンティティ葛藤・自己肯定感(自己相対化)を巡る認識

【3】韓国に滞在しながらあなた自身の生き方について考える機会になりましたか？

【8】今までの成長過程で、あなた自身のアイデンティティの混乱を経験したことはありますか？

【9】質問 8 の①、②を回答した人は、それはいつ頃ですか？

【10】韓国人としてのアイデンティティをもつことは重要と考えますか？

【11】自分自身を韓国人として認識していますか？

III群・韓国イメージの変化

【1】韓国に来て韓国に対するイメージの変化がありましたか？

【2】【1】の問いで①と②を回答した人はこの質問に答えてください。韓国のイメージはどのように変化しましたか？

IV群・韓国との融和・韓国人との交流

【5】韓国で 1 ヶ月以上の長期間の生活をしてみたいと思いますか？

【6】質問 5 の①、②に回答した人は、どの位の期間滞在したいと思っていますか？

【7】韓国で、韓国人と温かい交流を経験したこと

がありますか？

【13】韓国に来て、韓国人の海外養子に対する理解について、どのように感じていますか？

【15】韓国語・韓国文化がわからなくて恥ずかしいと感じたことがありましたか？

V群・教育プログラムに対する評価(韓国社会との関係性を中心に)

【16】韓国の大学や機関、団体などで韓国語または韓国文化を学習した経験がありますか？

【17】韓国語や韓国文化を学習した経験を通して、韓国社会を理解するのに助かりましたか？

【18】学習した内容に満足していますか？

【19】韓国語や韓国文化を学習する経験を通じて、韓国社会とつながる感じを持つことができましたか？

3 アンケートの実施概要と回答者の属性

3.1 実施概要

本研究では質問紙を一斉に配布して回答してもらった方法はなじまず、個別に趣旨説明した上で実施した。実施は、海外養子たちの受け入れ施設である「プリエ・チプ 7」に協力いただいた。調査対象等は、以下のとおりである。

【対象】韓国に短期・長期で滞在している成人した海外養子。【実施期間】：2011 年 5 月から 2012 年 3 月まで。個別回答方式。【回答数】：78

78 人の回答者の属性は、「成育国」「性別」「年

年齢」「職業」「学歴」「養子縁組した年齢」の7つから回答してもらった。結果は、以下の通りである。

3.2 回答者の【属性】

【成育国】

米国 24 人,デンマーク 10 人,オランダ 10 人,フランス 9 人,ドイツ 8 人,ノルウェー 6 人,ベルギー 4 人,スイス 3 人,スウェーデン 3 人,他 1 人。

【性別】

女性が 54%,男性が 46%。

【年齢】

回答者の年齢は,30 代が 39 人 (50%) ,20 代が 31 人,40 代が 4 人,10 代と 50 代がそれぞれ 2 人ずつとなっている。20 代,30 代が回答者の中心となっている。

【職業】

「学生」という回答が 31 人,「会社員」が 19 人,「その他」が 10 人となっているが,学生と仕事と両立させている場合もある。なお学生とは,韓国の大学で開設する韓国語コースを受講していることも含んでいる。

【学歴】

成育国での学歴は 46 人が大学卒業,16 人が高校卒業,その他 15 人は専門学校や大学院修了生などが含まれている。全般的に高学歴の傾向がみられる。

【養子縁組した年齢】

養子となって海外に渡った年齢は,1 歳未満が 35 人と 44.9%だが,多くが 5 歳前後までに分散している。半数近くが 1 歳未満の乳児の時に海外養子に送出されたということである。

4 質問への回答分析

4.1 I. 養親と成育環境に対する認識

【14】は,自分が海外養子に出されたことが結果的に良かったどうか,という「海外養子への肯定感」を尋ねている。つまり自己肯定感に関連している。「はい」が 34.6%,「少しそう思う」が 28.2%,合わせて 63%に達している。つまり 63%が,海外養子としての自分の境遇に一定の安定感をもっている。例えば,肯定側からしばしば聞くのに,海外養子だったからこそ大学も出られた,といった類の内容である。反対に海外養子ということに対して,「あまり思わない」「いいえ」を合わせた

12.8%が,いわば否定的回答をしている。つまり 63%の過半数が,自己の境遇に一定の安定感を持ちながらも,他方で 12.8%の人,7~8 人に 1 人が,海外養子制度に疑問を感じたり,また感じさせる成育体験があったものと推察される。この数値は,帰還する海外養子たちの抱える本質的な問題を示している。

【12】の「海外養子への評価」では,自分が海外養子縁組を肯定的に受け止めているか聞いたものである。「はい」の回答が 16.7%,「少しそう思う」が 30.8%,合わせて 48%と半数近くが肯定的評価をしている。反対に「あまり思わない」「いいえ」の否定的評価は合わせて 44.8%と肯定的評価と同じような数値となっている。つまり海外養子の中でも,海外養子制度自体に対する評価が明確に分かれているのであり【14】の海外養子たちの自己の境遇に対する否定的回答 12.8%の少なさと比べて,大きな違いとなって表れている。自己の成育体験の満足度,海外養子制度への評価にはずれがあると見ることが出来る。

その点で【4】では,養親と養子との安定した関係性を,「養親の韓国滞在への理解度」から見てみた。韓国滞在に対して養親が理解しているかに対して「そう思う」が 57.7%に達している。「少しそう思う」と合わせると 76.9%にも達している。養親は,全体的に子どもの訪韓を肯定的に捉えていると養子たちは理解している。一方で明らかに 14.1%は反対意思をもっていと捉えている。

【14】の 12.8%の否定的回答者の比率と類似した数値となっている。なお養親にとって実親のいる国への訪問や滞在は,許せないという気持ちをもっているのか,ここからは養父母との訪韓に対する葛藤も想像される。

4.2 II. アイデンティティ葛藤・自己

【8】では「成長過程でアイデンティティの混乱があったか」を聞いている。52.6%が「ある」と回答し,「少しはある」が 19.2%で,合わせると 71.8%に達している。反対の「あまりない」「ない」の合計 26.9%を大きく超えている。通常,海外養子たちの成長過程は,多様な曲折を感じる条件が多く,結果的に程度の差はありながらもアイデンティティの問題に直面することが指摘されてきた。そうした中でも成育環境にも関係し,26.9%は「あまりない」「ない」と回答している。この 26.9%の内訳(国籍や性別,養子年齢など)と関連させて分

析する必要がある。

アイデンティティの混乱時期について質問したのが【9】である。混乱した時期としては、「青少年期」が23.0%(18人)、「子どもの時」が7.7%(6人)、「成人してから」が7.7%(6人)、その他(複数期間の回答者をその他の項目とした)が33.3%(26人)、無回答が25.6%(20人)となっている。無回答20人は、アイデンティティの混乱を経験しながらも時期の特定は難しいということであろうか。アイデンティティの混乱とは、どういう状況を示すのか個人によって異なり、そうしたイメージの問題から回答しにくかった面もある。複数期間(長期間)の26人は、程度の差はありながらも長期にわたってアイデンティティに悩む成長体験を持っていたとみられる。そしてこの問題は海外養子たちにとって大きなテーマと思われる。

【8】と【9】に関連して、【10】では、「アイデンティティは重要なのか」を尋ねている。「重要である」37.2%、「少し重要である」38.5%、合わせて75.7%がその重要性を認識している。【8】のアイデンティティの混乱体験を持った71.8%と近い数値を示している。この両者は重複しているのか、【8】の回答との関連を見てみる必要がある。しかしその一方で、反対に16.7%が必要を感じない、余り感じないとも回答している。

【11】は韓国人としての意識、つまり韓国人としてのアイデンティティについて質問している。「はい」という回答をした意識は20.5%は韓国人としての自覚を持っていることになる。興味深いのは「少しそう思う」は43.6%にもなっている点である。これは成育国とのアイデンティティの多重性のもとで回答していると思われる。「はい」「少しそう思う」の肯定的な回答が64.1%に達しているが、反対に「いいえ」「余り思わない」という、韓国に対しての消極的考えも29.5%に達している。「はい」の20.5%とは対極な韓国人意識が指摘できる。

【3】では、韓国滞りが自分の生き方について考える機会となったかを尋ねている。67.9%が「そう思う」、25.6%が「少し思う」と回答している。つまり93.5%が滞在経験によって、多少なりとも自分の生き方を考える契機としているようである。滞在はさまざまな影響を与える。

関連した【5】の「長期滞在希望」の質問では、「そう思う」と「少し思う」が32.0%、滞りに消極

的な「あまり思わない」「思わない」が64.1%にも達している。このことから【3】に見られた韓国滞りが自己の生き方に影響を与えた、とする回答傾向であったのに、長期に滞在することに対しては消極的な回答が多いことが明らかとなった。韓国滞りが、さらに韓国との関係性を強く望むという滞在希望にはつながらないのである。韓国に滞在(帰還)することは、ストレートに韓国との関係を強くする、というよりも自己の生き方を考える契機とする程度の傾向にある。

4.3 Ⅲ. 韓国イメージ

【1】では、韓国滞りが、韓国イメージの変化を促したかを質問したもののだが、60.3%が「変化した」と回答している。「少しは変化した」と合わせて84.7%に達している。韓国滞りによって、成育国にいた時の持っていた韓国イメージが大きく変化したということであろう。変化したという84.7%の回答の内訳は、【2】において明らかとなる。【2】韓国イメージが「とても良くなった」「少し良くなった」という肯定的変化を示す回答が90.3%にも達している。多くの回答者が、好印象を持ったということである。しかし反対に「少し悪くなった」「とても悪くなった」は決して多くはないが8.1%いる。良さと悪さの両面を感じたせいであろうか。以上から、韓国滞りが韓国イメージの変化を促している実態があり、しかも極めて高いプラスのイメージ変化の傾向にあることがわかる。

4.4 Ⅳ. 韓国との融和・韓国人との交流

【5】韓国での1か月以上の長期滞在の希望の有無を聞いたものである。「そう思う」が20.5%、「少しそう思う」が11.5%、合わせて32.0%となっている。反対に「あまり思わない」が9.0%、「思わない」が55.1%、合わせて64.1%にも達している。つまり3人のうち2人程度は、長期滞りを希望していないということになる。

因みに【6】、【5】の「そう思う」「少し思う」の滞在希望の回答者だけに、滞在希望期間を尋ねてみた。1ヶ月程度が14.3%、2~3ヶ月程度が7.1%、それ以上が78.7%にも達している。とくに「できる限り長い期間暮らしたい」は42.9%にも達しているのである。このことは全体の1/3程度の滞在希望者は、多くが3か月以上の長期滞りを希望していて、2/3の長期滞在希望に否定的な者と明確に分離していることがわかる。

ところで「韓国滞在の影響」は、【7】「韓国人との交流」の体験の程度とも関係している。韓国人との温かい交流が「ある」と回答したものが64.1%、「少しはある」と合わせて92.3%にも達している。多くの回答者が多少なりとも韓国人に親切にされたり、プラスの交流経験を持っていることになる。この数値は、【1】の「韓国のイメージ変化」、【3】の「韓国滞在の影響」の回答と同一傾向にあり、韓国人とのプラスの交流体験が、韓国イメージに影響を与えていると推察される。

【13】では「韓国人の接触態度」について質問している。海外養子たちに対しての「理解不足をよく感じる」が38.5%にも達している。次いで「理解不足を少し思う」は25.6%、合わせて64.1%が、韓国人の海外養子に接する時の理解不足という問題点を指摘している⁸。

【15】は、韓国の言葉や文化がわからなくて恥ずかしいと感じた体験を持ったか聞いたものだが、「ある」という回答が32.1%、「少しそう思う」が30.8%、合わせて62.9%にもなっている。反対に恥ずかしいと感じた体験が、「あまりない」と「ない」合わせて35.9%、1/3程度いる。3人のうち2人は、韓国語や韓国文化がわからなく、恥を感じた経験を持っている。

4.5 V. 教育プログラムに対する評価

【16】は、「韓国語や韓国文化の学習経験」を尋ねている。この場合は、習った場所は成育国の場合と韓国内の場合とがある。そして韓国語または韓国文化を「習ったことがある」という学習経験者は44.9%にも達している。「いま習っている」の回答は14.1%で、合わせて59.0%が経験者といえる。つまり73.1%が長期・短期の学習経験や習う意欲を持っていることになる。

【17】は学習経験の内容について、【16】の「習ったことがある」「いま習っている」の経験者59.0%に聞いている。学習によって韓国社会への理解があったかという質問に対して、「そう思う」が62.2%、「少しそう思う」37.8%、全員が何らかの理解に役立ったと回答している。

関連して、【18】では、同じく学習経験者に対して学習内容の満足度を訪ねている。満足しているかという問いに、「そう思う」が39.6%、「少しそう思う」が39.6%、合計79.2%、ほぼ大半が満足したり適応したりしている。しかし「あまり思わない」「いいえ」が14.6%で、「わからない」と合わ

せた17%の原因を探ることはプログラム改善のためには必要と思われる。【19】は、韓国社会との一体感を持たかという質問に、79.6%が肯定的回答であった。

4.6 読み取れること

以上から次の点が指摘できる。

I群に関しては、自己の海外養子という境遇に対しては大方は肯定的だが、13%あまりが否定的である。その差異は何が原因しているのであろう。一つには養親との関係が、アイデンティティ葛藤に要因であることが明らかとなった。つまり養親との関係が安定していればアイデンティティの葛藤が低いとみられる。また海外養子制度自体の評価は、自己の成育とは離れた、いわば理念的に考える傾向にあることも指摘できた。

II群に関しては、過半数が成育過程でのアイデンティティ葛藤を体験している。そしてアイデンティティを持つことの重要性を認識し、それは彼/彼女らのアイデンティティ葛藤体験を通じて得られたものとみられる。この場合、葛藤は時期的には一時的な場合よりも一生抱えるほどの長期の問題として理解できる。またアイデンティティの葛藤は国、地域などの社会文化的な背景にも影響されているようで、関連してアジア系の人々が多住する米国、カナダは高いとイ・ミソンは指摘する⁹。

これらの諸点を踏まえ、養子たちの「韓国人としての自己意識」は3つの立場が存在している。「強く思う」場合、「成育国のアイデンティティと調和させる」場合、「否定的」な場合である。数値的には中間の調和させる立場が多い。

III群では、韓国滞在(生活)は、韓国のプラスイメージ形成に影響している。しかしそれが韓国に長期滞在したいという願望にはつながっていない。また関連してIV群では、接触・交流した韓国人は好意的だったが、しかし海外養子問題の理解は乏しく、それが養子たちのストレスの一要因となっている。

韓国の長期滞在(3か月以上)の希望者が32.0%だが、反対に64.1%あまりが「希望しない」としている。長期滞在は、単に韓国イメージの影響よりも、彼/彼女らの判断の契機となる別の要因があると考えられる。なお韓国語や韓国文化を知らず、恥をかいた体験は、2/3の回答者が持っていた。

V群では、韓国での海外養子向けの教育プログラムに対しては、59%あまりが受講体験を持ち、こ

れから受講するという回答を含めて、受講意欲は高い。しかし体験者の中の14.6%は、不安や不満を感じている面がある。その辺の理由を探ることも重要と思われる。

5 いくつかのクロス分析

ここでは3点に絞り、いくつか質問回答のクロス分析をしたい。

- ①「アイデンティティの混乱」体験と「アイデンティティの必要性」とのクロス集計
- ②「アイデンティティの混乱」体験と「韓国人としての意識」とのクロス集計
- ③「海外養子制度の肯定感」と「韓国長期滞在希望」とのクロス集計

についてである。つまり養子たちが「アイデンティティの必要性」をどの程度感じているのかを知ると共に、この「アイデンティティの必要性」が、「韓国人としての意識」にどのようにつながっているのかを見てみたい。また「海外養子制度の肯定感」は、養子自身が自己の境遇に一定の安定感を持っていることが前提になると推測されるが、そうした安定感を持った養子たちが「韓国長期滞在希望」の回答とどのように関連しているか見ようと思う。この3つの分析によってなぜ韓国に滞在するのか、その一端を明らかにしたい。

5.1 アイデンティティの混乱体験と必要感

【10】の「アイデンティティは必要か」という問いに対して、37.2%が「重要である」、38.5%が「少し重要である」と回答している。これらからその重要性を感じていることがわかる。

【10】で、アイデンティティについて「重要である」と「少し重要である」を回答した58人について、【8】「アイデンティティの混乱経験」の内訳を見てみる。55.2%が、混乱体験が「ある」とし、それに「少しある」20.7%と合わせた75.9%が何らかの混乱体験を持っていることになる。つまり混乱体験者が、アイデンティティが重要であることを認識する傾向にある、といえる。ここから類推できるは、混乱があったからこそ、アイデンティティは重要と認識していることである。図としては示さないが【10】で、「重要である」と回答したもののだけを見ると、その点はより一層明白となる。

5.2 韓国人意識とアイデンティティ

【8】で混乱の体験が「ある」と「少しある」と回答したものは合わせて64人だが、この64人が【11】(韓国人としての意識の有無)でどういう回答しているか見てみる。【8】の混乱体験者64人は、【11】では、「韓国人としての意識」が「ある」という回答が20%、「少しはある」が52%、合わせて72%となっている。反対に「あまり思わない」と「いいえ」を合わせてほぼ28%となっている。「意識がある」の72%の内訳をもう少し詳しく見ると、混乱体験が強いほど(【8】の「ある」)の方が、【8】の「少しはある」より、韓国人としての意識傾向が強い。つまり成長過程の混乱が、結局は韓国人としての自意識と葛藤する場面が強かったことを想定させる。

5.3 韓国滞在希望と「養子制度」観

【12】の海外養子制度に対して「はい」という肯定的評価を下している13人について、【5】の「韓国滞在希望の有無」との関係を見てみる。海外養子制度の肯定観が韓国滞在希望とどのように関連しているかをみたものである。「ある」の肯定的回答者の場合、韓国に「長期滞在」することの希望者が23.1%、「少し思う」が7.7%、合計30.8%となっている。反対に「思わない」が69.2%という高さであり、養子制度に対し肯定観を持つ人ほど、逆に滞在を希望しないという傾向が指摘できる。

6 まとめ

教育プログラムの支援や条件を考える時、彼/彼女らのアイデンティティの一層の安定化と「なぜ韓国を訪問したか」の目的を十分に意識していく必要を感じる。以下、その改善ための視点を示しておきたい。

- ・帰還者のアイデンティティの問題は、その安定のためには養親との関係が安定することが大事であり、成人後であったとしてもその回復を支援できる配慮が必要である。
- ・プログラムを構想するとき、成育した国や地域の社会文化的背景と葛藤の分析が必要である。
- ・韓国滞在の機会は、韓国イメージの好転に役立っており、そうした機会をできるだけ提供する。また一方で海外養子に無理解と思われる韓国社会が存在しており、教育プログラム担当者は、十分に彼/彼女らの苦悩や葛藤を理解しておく必要がある。

例えば「家族」や「家系」などに関する教育内容は、慎重にすべきである¹⁰。

・韓国滞在はアイデンティティを求める動向と深くつながっていると考えられる。教育担当者はこの点も配慮すべきであり、教材もこうした海外養子の葛藤に向き合う内容も必要に思われる。

「注」

- 1) 坂井菜央美"韓国海外養子研究の動向と教育学的課題"『生涯学習基盤経営研究』no35,2010,p.57-64.
- 2) 米国育ちの チョンギョンア氏への 2010 年 3 月 23 日のインタビューでは、大学での韓国語コースでは寄宿舎生活が原則で、集団規律の中で動くことに抵抗があったと指摘している。また韓国語コースで、「家族」の話が繰り返し出てくるので、いやになってしまうとの発言をしている。韓国社会への適応教育の発想があるからと思われる。
- 3) バク・インソン"海外入養人の自己正体感と入養実践現場の課題"『韓国児童福祉学』no5,1997,p.147-167.
- 4) イ・ミソン"海外入養人の自己正体感およびこれに影響を与える要因に関する研究"『韓国児童福祉学』no14,2002,p.114-143.同、『海外養子の心理社会的適応に影響を及ぼす要因に関する研究』ソウル女子大学校博士論文,2001.12,p.1-158.
- 5) コ・ヘヨン、イム・ヨンシク"海外養子の心理社会的適用"『未来青少年学会誌』vol.2,no2,2005,p.5-16.
- 6) *ipid*,p.12.
- 7) ブリエチブ,"<http://www.koroot.org/>(2012-9・1).
- 8) イ・ソンヒ『韓国人の海外養子たちに対する認識調査—接触集団と非接触集団の認識比較を中心に—』,延世大学校修士論文,2006,p.1-56. この論文は韓国人の意識調査だが、海外養子たちに対する様々な意識差は接触経験が大きく影響していることを指摘している。
- 9) イ・ミソン(2002), *op. cit.* p. 138.
- 10) イ・ミソンは養子たちにインターネットサイトによる調査を実施している。「事後サービス」として高い順に「実家族探し」「韓国訪問」「韓国文化経験」「韓国文化紹介(児童放任・虐待などの概念の違い)」「韓国語教育」「養子関連長期相談」「健康サービス」「家族葛藤解決サービス」に求めているとした。養子の背景として児童放任や虐待、健康問題、家族葛藤解決などにも関心が高いことが示している(“海外養子たちの事後管理サービスに関する調査”『臨床社会事業研究』vol12, no2, p. 113-139.

A Quantitative Study of South Korean Adoptees Returning to Their Birth Country: Focusing on Identity Conflicts

Naomi SAKAI †

† Graduate School of Education, the University of Tokyo

Following the Korean War in the 1950s, a total of more than 150,000 South Korean children were sent abroad for adoption. These children experienced many psychological conflicts as they grew up, including uncertainty about their identity. Since 2000, the number of adoptees returning to visit South Korea has rapidly increased. A variety of educational programs are provided to adoptees visiting South Korea. In order to develop better educational programs, it is important to consider adoptees' identity conflicts and what they want to learn. The present research is a quantitative study that uses a questionnaire to investigate how adoptees grew up, the diversity of conflicts they have faced, their relations with their foster parents, and the meaning of reunion with their birth parents.

Keywords: identity, overseas adoption in Korea, lifelong learning